

編集後記

所長、副所長の交代を受けて1年、ようやく『人間学紀要』vol. 2を皆さんのお手元に届けることができる運びとなりました。創刊号が1996年から1999年の大学完成まで、4年間にわたる人間学研究所の多大な成果を盛り込んだ立派な紀要ただだけに、その後を受けて、本号の編集には非常にプレッシャーがかかりました。教育、研究活動に加えて、新設の大学にありがちな設備、制度面での不備を教員のマン・パワーで補わざるを得ないこの状況下で、本当に前号からわずか一年で紀要として出版するに足るだけの質、量とも十分な論文が集まるだろうか、先生方にそれだけの余力が残されているだろうか、という懸念が拭い切れなかったからです。今、改めて印刷所から戻されてきた校正刷りを前にして、それが杞憂であったとほっと安堵しているところです。

それにしても昨今の大学、その研究機関としての人間学研究所を取り巻く状況には厳しいものがあります。研究者である我々がその研究成果を世に問い、また新たな問題提起をしていく機関として、人間学研究所の機能は大学にとっても広く社会にとっても決して看過できないものだと思います。とりわけ臨床心理学と文化人類学という、我が国においてもあまり類を見ないユニークな研究領域を学科として抱えている本学において、その相互作用や交流を通して得られる知見は、両学問領域を越えて広く社会で求められている内的、外的世界の拡大にとって、とても重要なものであるはずなのですが…。

人間学研究所が現在果たし、また将来的に担っていくべき機能とは、ユニークな本学研究者たちの研究成果の公表、そこに集う人々の交流と相互研鑽の場を提供すること、さらに新たな問題意識や視点を創出していくことであろうと思います。そこでこれまで中心的な役割を担って頂いていた助手の鶴見さん、谷口さんを送り出さざるを得なかったことについては慙愧の念に堪えません。臨床心理学科に所属しつつ文化人類学的方法論を知悉した鶴見さん、もともと心理学を学び、文化人類学へと転向した谷口さんは、本学人間学研究所にとって真に得がたい人材でした。この場を借りて、彼らの貢献に対し、心より感謝の気持ちを表したいと思います。

彼らの直接的な支援を得ることができなくなった今、人間学研究所は片肺飛行の飛行機のような状態です。それでも可能な限り、明るい側面を見ながら人間学研究所を運営していきたいと思えます。暖かなご支援を、今後ともよろしくお願い申し上げます。

高石 浩一

編集委員 日野 舜也 高石 浩一 西川 祐子
鈴木 七美 平岡 聡 香川 克
竹内 裕子 鶴見 太郎

京都文教大学人間学研究所紀要 第二号

2001年3月31日 印刷

2001年3月31日 発行

編集・発行 京都文教大学人間学研究所
〒611-0041 宇治市槇島町千足80
☎0774-23-3121

印刷 (株) 栄文堂印刷所